6 月 11 日のメッセージ

聖書：使徒言行録　2：　37 – 47

「だれにでも」

以前、礼拝について話しているなかで、こんな話を聞いたことがあります。

「なぜ、教会の礼拝に遅刻してはならないのか。私は、子どもの頃、『天皇陛下から呼び出されたら、遅れていく者がありますか』と教わりました。神さまの招きはそれ以上なのだから、遅れないようにしています」と。心の有り様として素晴らしいと思いつつ、世代の違う者にはまた別の理屈が必要だろうとも思いました。

ところが、聖書には、その神さまの呼び出しを平気でキャンセルする者たちが出てきます。神の国の宴会に招かれていながら、自分の都合を優先する者たちが何人も出てくるのです(「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。すると皆、次々に断った。最初の人は、『畑を買ったので、見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。どうか、失礼させてください』と言った。また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。」ルカによる福音書 14:16-20)。

もちろん、それぞれやむにやまれぬ事情なのでしょう。それに対する主人(=神)の応答は耳に痛いものがあります(「言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を味わう者は一人もいない。」ルカによる福音書 14:24)。

ただ、この話をそのままストレートに「今」に持ち込むことには一抹の不安もあることは確かです。特に、たくさんやらなければならないことが増えている現代においては、「安息日を心に留め、これを聖別せよ。」(出エジプト記 20:8)との言葉に従うことさえ難しい現実があるからです。

だからといって、神の言葉をないがしろにしても良いとは思いませんが、しかし、神はそのような一人ひとりを見捨てたり、見放したりされることはない、と信じたいのです。なぜなら、神は呼び求める者に何の資格も必要とされない方だからです(「わたしの僕ダビデに告げよ。万軍の主はこう言われる。わたしは牧場の羊の群れの後ろからあなたを取って、わたしの民イスラエルの指導者にした。」サムエル記下 7:8)。宴席に空席があるならば、無理にでも人を連れてこようとさせる方だからです(「主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。」ルカによる福音書 14:23)。

「この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」(使徒言行録 2:39)

神さまに招かれるのは「できる人」ばかりではありません。日曜日、何とか礼拝の時間だけでも、と前掛けを外しながら駆け込んでくる八百屋さんも招かれています。その人が、その人のままで招かれているのです。

だから、大人も、子どもも、「今できる人」も、「今はすることが難しい人」も皆、それぞれらしく招かれています。そんな、様々な個性を持った人たちの集まりは、なんと美しいことでしょう。なんと素晴らしいことでしょう(「見よ、兄弟が共に座っている。なんという恵み、なんという喜び。」詩編 133:1)。

そして、一人ひとりがその時できる形で、できる仕方で応えようとする姿を神さまは決して見逃されることはありません。集うことができる者、配信を通して同じ時を過ごそうとする者、この時を覚えて祈りを併せる者、それぞれの場所で与えられた役割を懸命に果たそうとする者、etc.

神さまは今日も私たちを招かれています。その招きに何とか応える私たちでありたい。決意を新たにする今日としましょう。